

物語論的自己分析ツールによる
大学1・2年生の自己意識の変化パターンの分析：
女子大生のキャリア支援のための基礎的研究（2）

西村 純一*、佐久間 香子**、吉田 滋子***、
平澤 尚孝****、福本 俊*****、堀田 千秋*****、井島 由佳*****

（平成24年1月31日査読受理日）

Analysis of Patterns of Change in Self-consciousness among
University Freshmen and Sophomores Using Narrative Self-assessment:
Basic Research for Career Support at a Women's College (2)

NISHIMURA, Junichi SAKUMA, Kyoko YOSHIDA, Shigeko
HIRASAWA, Naotaka FUKUMOTO, Shun HOTTA, Chiaki and IJIMA, Yuka

(Accepted for publication 31 January 2012)

キーワード：物語論的自己分析ツール、女子大学、1・2年生、自己意識、変化パターン、多重応答分析、キャリア支援
Key words: women's college, freshmen and sophomores, narrative self-assessment, self-consciousness, change patterns, multiple correspondence analysis, career support

問題

大学1・2年生のキャリア発達では、高校の進路決定時の発達課題を土台としつつ、専門領域での学修や体験を価値づけ・意味づけ累積させていくための行動と態度を発達させることが必要である(渡辺, 2009)。そのため、大学1・2年生のキャリア形成支援では、専門領域の学修や体験を価値づけ・意味づけを育てる自己分析が重要である。我々は、そのような観点から伝統的な特性論的な自己分析のツールではなく、物語論的な自己分析のツールを作成し、その有効性について検討してきた(西村・平澤・福本・堀田・井島・佐久間・吉田, 2010; 西村・平澤・福本・堀田・井島・佐久間・吉田・井島, 2011a; 西村・佐久間・吉田・平澤・福本・堀田・井島, 2011b)。これら一連の研究を、以下「これまでの研究(西村他, 2010, 2011a, 2011b)」と記す。

これまでの自己分析のツールの大部分は、理論的には特性論の考え方に基づいている。特性論的な自己分析のツールを作成するに当たっては、統計学的に特性因子を抽出す

ることが基軸となっており、その手続きは科学的である。しかし、そのようにして抽出された種々の特性にもとづく相対的特徴をいくら寄せ木細工のように積み上げたとしても、自分を適当十分に理解できたとはいえないように思われる。榎本(2009)は、自分とは何か、を理解するためには、自分はどのような生き方をしているのか、について考えてみるのが重要であると述べている。自分の生き方を振り返ってみるという視点からの自己分析がキャリア形成の支援の場では必要とされているように思われる。

そこで、そのような自分はどのような生き方をしているのかという視点から、新しいかたちの自己分析として考えられたのが、自己物語による自己分析であった。榎本(2008)は、次のように述べている。「・・・そこでは、『自分とは何か』という問いは、『自分はどのような生き方をしているのか』という問いに形を変える。自分を振り返るには、まず自分はどんな人生を送ってきたかを振り返ればよい。そして、この先どんな人生になるだろうか。自分はどんな人生を送りたいのだろうかといったことを具体的に考えてみればよい。」また、「自己を語ることには、さまざまな経験を時間軸上に位置づけることによって、過去から現在に至る自己形成史の流れを理解し、その延長に未来を展望することを可能にする機能がある。そのおかげで個人の人生に一貫性や統合性がもたらされる。」

これまでの研究(西村他, 2010, 2011a, 2011b)では、このような視点から、自己物語の考え方を導入して一つの新しいタイプの自己分析のワークシートを作成した。また、自己物語的自己分析ツールを作成するに当たって、渡辺

* 心理カウンセリング学科産業心理研究室

** 災害医療センター精神科

*** 新橋アサイクリック

**** 元東京家政大学

***** 東京成徳短期大学

***** 元日本労働政策研究研修機構

***** 家政学研究科博士課程

(2009)のキャリア発達の視点を参考に、次の4点に留意した。①大学時代の発達課題は、高校卒業時の暫定的選択(仮の進路決定)という発達の課題の達成を土台としている点を重視し、なぜ今の大学・学科を選んで入ってきたのか、入学の経緯を振り返らせる。②大学時代の発達課題においては、選択した進路(専門領域)の中でできるだけ新たな諸体験の価値づけや意味づけを累積するための行動と態度を発達させることが重要である点を重視し、入学後、現在に至るまでの学修状況を振り返らせる。③さらに、そうした現在の自分自身の状況を、本人がどのように感じているのか、振り返らせる。④最後に、次段階の課題である『社会人としての自立』に向け、どのような夢、目標を持っているか、将来の望ましい自己像について考えさせる(西村他, 2011a)。

これまでのインフォーマルなワークシートのなかにも、こうした物語的なワークシートがある程度あり、たんなる特性論的なツールの簡便な代替というだけでなく、特性論的なツールの不十分な点を補う役目を果たしてきたように思われる。しかし、そうした物語論的ワークシートに関しては、特性論的ツールのような系統的な統計的な検討はほとんど行われてこなかったように思われる。ローカルに各地のキャリアセンターで、あるいは個々のキャリアカウンセラーの実用的な経験に基づいて活用されてきたというのがほとんどではなかったかと推測される。そこで、我々は、某女子大学の二つの学科の1・2年生を対象に、この物語論的ワークシートを実施し、こうした物語論的ワークシートに含まれている情報を統計的に分析し、その有用性についての検討を行った(西村他, 2010, 2011a, 2011b)。

これまでの研究(西村他, 2010, 2011a, 2011b)では、入学の経緯、現在の学修状況、将来の自己像という時間軸の流れのなかで、現在の自分自身をどうとらえ、評価しているか、いまの自分に関する自己物語に注目した。そして、二人の質的研究の経験者がいまの自分に関する記述を独立に内容分析した後に照合して、大学1・2年の現在の自分の状況を理解する上で有用なカテゴリーを14抽出した。次に、個々の対象者の記述に各カテゴリーが含まれているか点検し、1・0データ化が図られた。

さらに、この1・0データに多重応答分析を適用し、主要な次元を2つ抽出し、カテゴリー間の空間的配置について検討すると共に、サンプル・スコアについて分布の形状や他の変数との相関関係が分析された。カテゴリー間の配置から、第1軸は、いまの自分がよく動いているかを評価する「活動性」の次元と解釈された。また、第2軸は、いまの自分の状態をどの程度明確に説明できているか「説明度」の次元と解釈された。大学1・2年の現在の自己意識をとらえる枠組みとして、この二つの次元は有用であると考えられた。

この二つの次元のサンプル・スコアの分布はおおむね正規分布しており、両次元とも行動的・心理的な個人差がある程度反映していると推測された。そこで、同時に測定されたパーソナリティ・テスト(NEOとTEGII)の変数との相関関係を分析したところ、次元1は、NEOのN(情緒不安定性)、TEGIIのNP(養育的親)と低い有意な相関が認められた。これは、ストレスに弱い情緒不安定性の高いほど活動性が低いこと、人への思いやりが高いほど活動性が高いことを示唆していた。

他方、次元2は、NEOのN、TEGIIのCP(批判的親)、NP、FC(自由な子ども)とそれぞれ低い有意な相関が認められた。これらは、ストレスに弱い情緒不安定性の高いほどいまの自分についての説明度が低いこと、厳格さや責任感の高いほど説明度が高いこと、思いやりの高いほど説明度が高いこと、自由奔放で明るいほど説明度が高いこと、などが示唆された。これらの結果は概ね首肯できる結果であり、したがって、現在の自分自身についての記述の中にパーソナリティが少なからず表出されていることが視われた。

また、両次元に、1年と2年の学年差が認められた。これらは、1年は2年に比べて活動性が低く、逆に、2年は1年に比べて説明度が低いことを示唆していた。しかし、1年と2年のデータはそれぞれ異なる学科で収集されたため、学年差と学科の違いが交絡(confound)している可能性があった。そのため、西村他(2011a)では、学年差についての細部の検討を控え、今後の課題とした。

そこで、今回の研究では、学年差と学科の違いが交絡しないように、一つの学科に絞り、その学生たちのサンプル・スコアが、1年から2年にかけてどのように変化するか、あるいは変化しないのか、変化するとすればどのような方向に変化するのか、そこにはどのような変化のパターンが存在するかを検討する。今回の研究においても、これまでの研究(西村他, 2010, 2011a, 2011b)と同様に質的アプローチと量的アプローチをミックスした方法(Creswell, 2003)を用いることとする。

物語論的自己分析ツールによるデータは個性記述的なデータであり、基本的には質的研究を重視している。しかし、そのデータの情動的意味を分析するに際しては、データをカテゴリー化し、そのカテゴリカルデータに対して統計的分析を適用し、系統的な分析を試みている。もとより、その統計的分析はこれまでの尺度構成的な信頼性や妥当性の検証を目指したのではなく、このワークシートに含まれている情報の質を検討し、それをキャリア支援の糸口としていかに生かしていけるかについて検討することを意図している。

2. 方法

調査対象者 これまでの研究(西村他, 2010, 2011a, 2011b)では, A女子大学のB学科の1年94名とC学科2年の114名の協力を得て, 1回目の物語的ワークシートを実施した. 今回の研究では, B学科の協力者(現在, 2年になっている)のうち61名の協力を得て, 2回目の物語的ワークシートを実施した.

調査内容 今回の研究ではこれまでの研究(西村他, 2010, 2011a, 2011b)と同様の物語的ワークシートを使用した. ワークシートは, 自己物語の意義を理解した上で作業に取り組んでもらうため, ワークシートの冒頭に榎本(2008)の自己物語の説明が書かれている. これを読み, 実施日, 所属学科, 学籍番号, 氏名を記入したのち, 以下の4つの質問に自由記述で回答してもらった. 具体的内容・形式については, 西村他(2011a)を参照されたい.

- ① 大学・学科を受けることになった経緯
- ② 学科の中で何をどのように学びたいか
- ③ 今の自分自身をどのように思っているか
- ④ こんな風になっていたらいいなという自分の将来像

1年のデータ収集では, このほかに, NEOの5つの尺度(N=情緒不安定性, E=外向性, O=開放性, A=協調性, C=誠実性), TEG IIの5つの尺度(CP=批判的親, NP=養育的親, A=成人, FC=自由な子ども, AC=順応した子ども)についても測定した(柏木, 1997; 辻, 1998; 東京大学医学部心療内科TEG研究会, 2006).

しかし, 2年のデータ収集では, 時間的・物理的制約等もあり, 物語的ワークシートのうち, 「今の自分自身をどのように思っているか」のパートに絞って実施した. なお, 1年のときのデータと照合する必要から, 了解の上, 学籍番号についても記入してもらった.

調査手続き 1年のデータは, 前報の研究(西村他, 2011a)で収集したもので, B学科の1年の心理学実験実習(必修なので全員履修, 1・2限連続の授業)の後期の授業の終了後の時間に, 調査の趣旨(大学生のキャリア形成支援の基礎的資料として研究する)とやり方を説明し, 実施した. また, NEOとTEG IIは, 心理学実験実習の授業の一環として授業中に実施されたものである.

2年のデータは, 1年時に物語的ワークシートの実施に協力してくれたもののうち, 2年のカウンセリング論の履修者に依頼し, 授業終了後に実施されたものである.

調査時期 1年のデータは, 平成21年の10月, 2年のデータは, 平成22年の10月に収集した.

データの分析手順 西村他(2011a)と同様に, ふたりの質的研究の経験者が自己物語ワークシートの回答の内容分析(有馬, 2007)を行い, 互いに独立にカテゴリーを抽出した後照合し, その上でカテゴリーを整理した. ただ

表1 「今の自分自身をどう思っているか」に対する記述内容のカテゴリー化

番号	カテゴリーの内容
C1	自分はこういう人 (いいところや好きなところの記述)
C2	うまくやれている・頑張っている
C3	よくなってきている
C4	さらによくなりたい・理想の自分になりたい
C5	不足なところを直したい・変わりたい
C6	自分のよくないところや不足なところの記述
C7	先が見えていない・迷っている
C8	感情が不安定・やる気が出ない
C9	自分らしくできていない・自分がわかっていない
C10	人との関係がうまくない
C11	忙しい・課題に追われている・余裕がない
C12	うまくやれていないが, 頑張っている
C13	自己否定・自分のうまくいっていないところ嫌い
C14	自己受容・自分のためなところを含めて受容

し, これまでの研究(西村他, 2010, 2011a, 2011b)と同様今回の研究でも, 単に文章の意味内容をカテゴリー化しているわけではなく, 入学の経緯, 学修状況, 今の自分, 将来の自分, それぞれのつながりを文脈的にとらえているので, たんなる内容分析とするよりはナラティブ分析とする方が適切かもしれない. 当該のカテゴリーに関する記述の有無によって1, 0データ化した. 今回収集した2年のデータから新たなカテゴリーの追加はなかった. したがって, 今回の研究においても, 表に示す14のカテゴリーを採用した.

今回の研究の分析は大きく分析Ⅰと分析Ⅱに分かれる. 分析Ⅰでは, 昨年実施したA女子大学のB学科1年94名のデータに, 彼らが2年になったときの61名のデータを追加し, 以上155人分を独立のサンプルと見なして, PASW Statistics 17.0により多重応答分析(石井, 2001)を行った. 学年差と学科差が交絡しないように昨年実施したC学科2年114名のデータは除外し, B学科のみのデータについて分析した. 抽出された2次元上の14のカテゴリーの空間的布置から次元の解釈を行った. 次に, 1年と2年のサンプルも分布状況を比較すると共に, サンプル・スコアに学年差があるか, 平均値の差のt検定を行った.

分析Ⅱでは, 1年と2年にわたって2回測定したサンプル61名のサンプル・スコアの変化量を求め, 変化量の分布の形状を分析すると共に, 変化量とパーソナリティ変数との相関関係の検討を行った. さらに, 1年から2年へかけての変化パターンの検討を行い典型的な7つのパターンを挙げて, その特徴について検討した.

結果と考察

分析 I

図1は、各カテゴリーについての記述がある場合のポイントが2次元の空間上に布置されたものである。各カテゴリーの記述のない場合のサンプルの重心はおおむね原点付近に布置されているが、図が複雑になるため省略した。

次元1は、プラス方向に「C13 自己否定・自分のうまくいってないところ嫌い」「C9 自分らしくできていない」「C10 人との関係うまくない」「C5 不足なところを直したい・変わりたい」「C8 感情が不安定・やる気が出ない」など、主として自分の内面に視点が向いて、なんらかの活動を行おうという方向性が乏しく停滞感が覗かれる自己否定的カテゴリーが布置されている。マイナス方向には、「C3 よくなってきている」「C14 自分のためなところを含めて自分を受容」「C4 うまくやれていないが、頑張っている」「C4 さらによくなりたい・理想の自分になりたい」などのなんらかの活動を行っている、もしくは、これからさらに積極的に活動を行おうとする方向性を持った自己肯定的表現のカテゴリーが布置されている。

この布置は、前報（西村他，2011a）の結果とほぼ同じであり、次元1は、前報同様に「活動性」を反映しており、マイナス方向に活動性の高さをプラス方向に活動性の低さを判別していると考えられる。しかし、前回はとくに「動いているか・動けていないか」という点を重視し、次元1を「活動性」と解釈したが、Grounded Theory

Approach (GTA)（戈木クレイグヒル，2006）に準じる方法でその内容を綿密に検討した結果、この次元は活動性自体というよりは活動に伴う現在の自己評価の意味が強いため「現状の肯定感」という名称に改めることとした。

次元2のプラス方向には、「C14 自分のためなところを含めて自分を受容」「C11 忙しい・課題に追われている・余裕がない」など必ずしもうまくやれてはいないが、自分のためなところを含めて、自己の現在の状態や特徴について自分なりに捉えて受け止め、説明できていることが覗かれるカテゴリーが布置されている。マイナス方向には、「C12 うまくやれていないが頑張っている」「C7 先が見えていない・迷っている」「C8 感情が不安定・やる気が出ない」「C13 自己否定・自分のうまくいってないところ嫌い」など自分についてよく把握できておらず、説明できていないことを示すカテゴリーが布置されている。

この布置も、前報（西村他，2011a）の結果とほぼ同じであった。したがって、次元2は前報同様に「自己の説明度」を反映しており、説明度の高さをプラス方向に、説明度の低さをマイナス方向に判別していると考えられる。しかし、前報はとくに「自己の状況について説明できているか・説明できていないか」という点を重視し、次元2を「説明度」と解釈したが、GTAに準じる方法でその内容を綿密に検討した結果、この次元は説明度というよりは、説明のための自己の状況の把握ができているかが重要なので、「現状の把握度」という名称に改めることとした。

なお、「忙しい・課題に追われている・余裕がない」は、

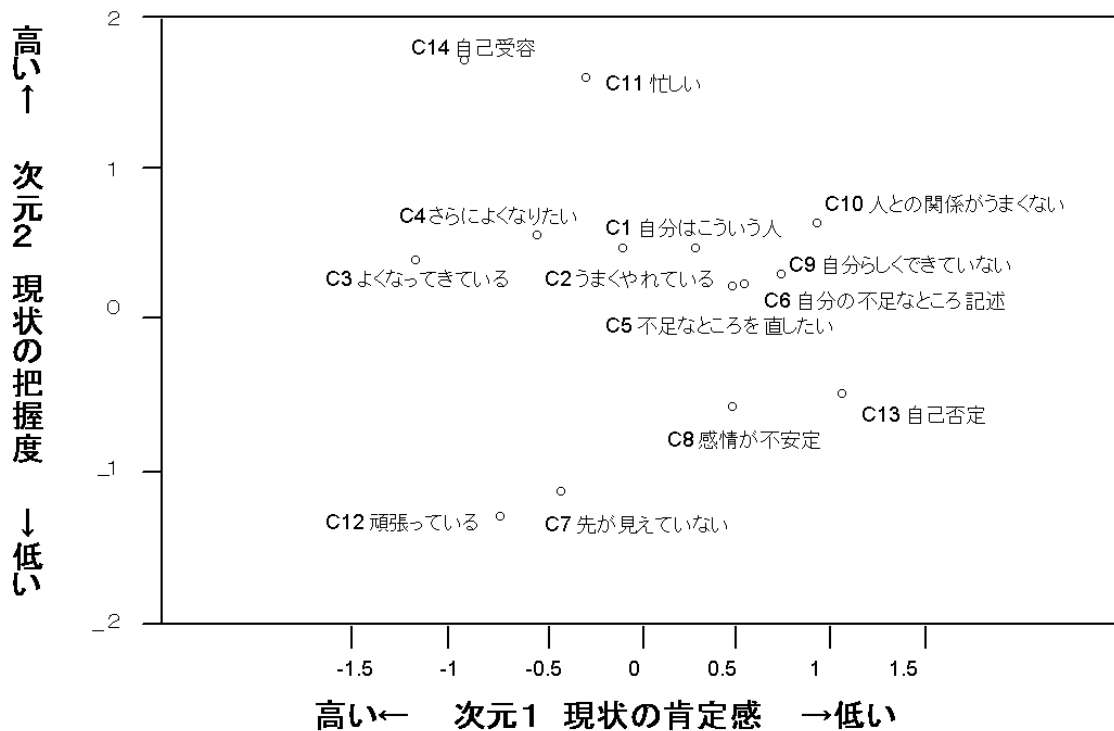


図1 カテゴリーポイントの結合プロット

前報(西村他, 2011a)の分析では現状の把握度の低い方に位置していたが, 今回の分析では逆に現状の把握度の高い方に布置されている. 大方のポイントは前報と同じ方向に位置しているが, このカテゴリーだけが前報と逆の方向に位置している. この点に関しては, 対象者の構成の違いが影響した可能性が考えられる. 前報は1年がB学科の学生, 2年がC学科の学生で, 2年の方が1年よりも人数が多かったため, C学科の傾向が現れやすかったのに対して, 今回は1年, 2年ともB学科の学生であるため, B学科の傾向が前面に現れたと推測される. そこで, 両学科の特徴を比較すると, C学科は学際的な学科で専門性や資格の選択の自由度が高く, レポート課題の多い実習は2年から始まるのに対して, B学科は専門性や目指す資格が1年から明確で, 1年からレポート課題の多い実習が組み込まれているといった違いを指摘することができる. たしかに, こうした違いが学生の忙しさや課題の現状の把握度に違いをもたらした可能性は考えられる. しかし, 今回の研究からは一概に言えず, さらに検討してみる必要がある.

このように前報の結果(西村他, 2011a)と今回の結果とで一部食い違いは認められるものの, 基本的には同じ結果が得られており, 前報の14のカテゴリーとそこから抽出された2次元的理解の枠組みは, 名称変更はあったものの, 大学1・2年生の現在の自己意識をとらえる上でそれなりに有効な枠組みであることを示していると考えられる.

図2は, 2つの次元におけるB学科の1年と2年の人数の分布を示したものである. 表中の数字は桁目ごとの人数を表している. これによると, 1年は両次元のプラス方向に多く分布する傾向があるのに対して, 2年は両次元のマイナス方向に分布する傾向が強まっており, 全体に図の右上の空間から左下の空間へややシフトする傾向が覗かれる.

表2は, B学科の1年と2年の学年差について, 平均値と標準偏差, ならびにt検定の結果を示したものである. なお, 61名は反復測定と見なせなくもないが, まったく独立に内容分析からデータ化したものなので, 一応独立のサンプルと見なして統計的な検定を行った. いずれの次元も0.1%水準で有意であった.

こうした次元1の学年差は, 大学の1年よりも2年の方が現状の肯定感が高まっていることを意味している. これは, 1年よりも2年の方が大学生活になれ, 学修, サークル活動, アルバイトなどいろいろな側面で活動の範囲が広がってきており, 現状を肯定的に受け止めている状況を反映していると考えられる. 他方, 次元2の学年差は, 大学の1年よりも2年の方が現状の把握度が低くなっていることを示している. これは, 1年の時は, 現在の学修の状況や自分の将来について漠然とながらも把握できていたものが, 2年になっていろいろと専門や資格について知識を得たり経験するなかで, 自分の将来に対する見通しの甘さを自覚させられたり, 現状の学修状況を反省したりすることが増えるためではないかと推測される. そのことはネガティ

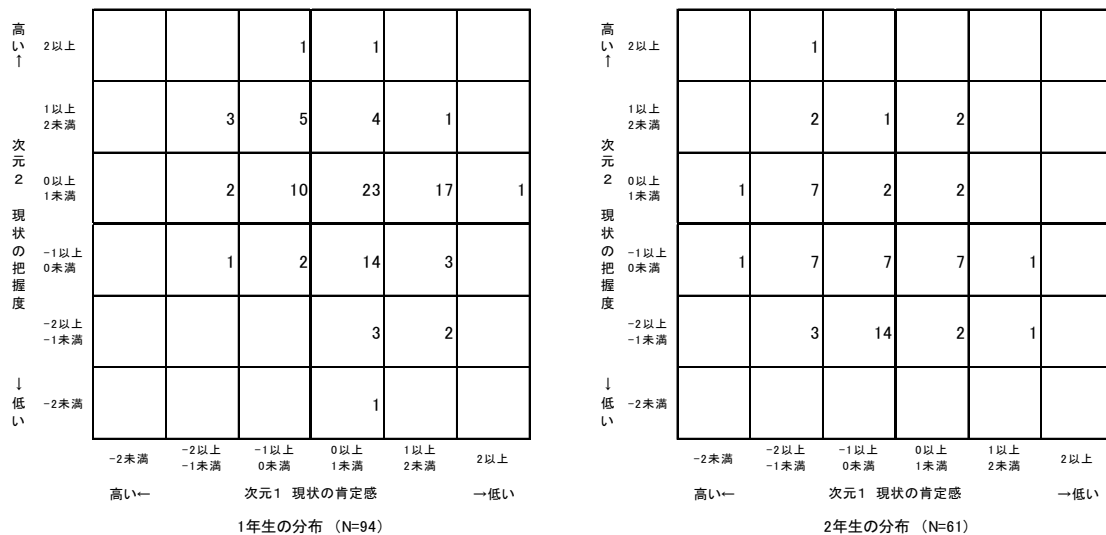


図2 2つの次元における1年生, 2年生の分布

表2 二つの次元からみた大学1年と2年の差

次元	学年	N	平均値	標準偏差	t検定
次元1	1年	94	.388	.839	p < .001
現状の肯定感	2年	61	-.599	.889	
次元2	1年	94	.279	.852	p < .001
現状の把握度	2年	61	-.429	1.024	

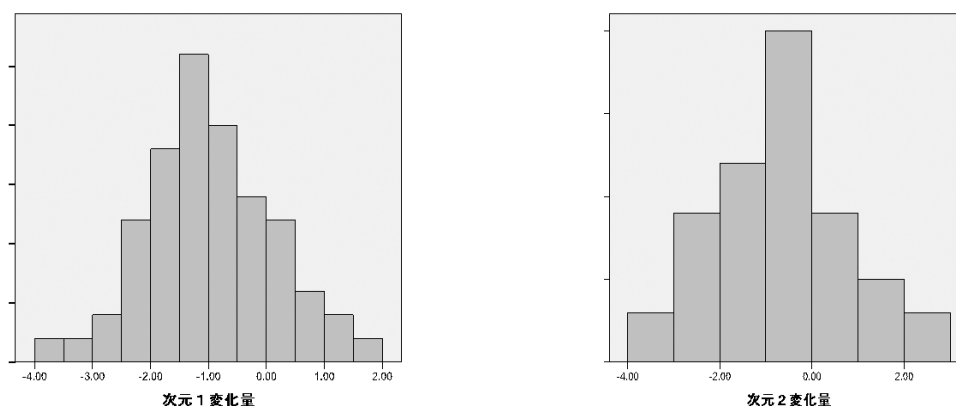


図3 両次元における変化量の分布

ブにとらえることもできるが、より広い視野から現実的・合理的に考えることができるようになってきている証とみることもできなくはない。

分析Ⅱ

B学科のうち1年と2年の2回にわたって測定した学生のみを選定し、両次元における変化量を算出し、その分布の形状をみたのが図3である。次元1の変化量も次元2の変化量も基本的には正規型を示しており、分布の形状からは、両次元の変動に特別な偏りはなく、なんらかの心理的・行動的内容を反映していると推測できる。

そこで、これらの変化量とパーソナリティ変数との相関係数について分析した結果が表3である。それによると、次元1の現状の肯定感の1年から2年へかけての変化量は、NEOのC（誠実性）と-.331の低い5%水準の有意な逆相関を示した。Cは誠実性の尺度とされているが、とくに達成意欲に関係していると言われている。そうした点からすると、1年生から2年生へかけての現状の肯定感の増加は、ある程度、学生の達成意欲の高さに関連していると考えられる。また、次元2の現状の把握度の1年2年へかけての変化量は、TEGⅡのAC（従順な子ども）と-.300の

低い5%水準の有意な逆相関を示した。ACは、とくに外への従順さを表すと言われている。そのような観点からみると、この結果は、外に従順なよい子ほど現状の把握度が低下する傾向があることを示しており、注目に値する。これは、これまで外に対して従順であったよい子ほど、現在の学修状況に満足できなくなったり、疑いなく選んで進んできた自分の進路について迷いが生じやすいことを示唆しているように思われる。たとえば、B学科のオープンキャンパスでは、面接担当の教員と受験生とその保護者の3者面談がしばしば行われているが、保護者の方が受験生自身より資格や就職に対する関心が強く、子どもがそれに従っているようなケースが少なくない。したがって、一概に言えないが、B学科では、入学後、1年から2年にかけて、こうした従順な子どものなかで、自分の現在の状況に迷いを生じるというケースがある程度存在するように思われる。

たしかに、全体としてみると、1年から2年にかけて、現状の肯定感が増加するも現状の把握度が低下する傾向が認められた。しかし、全体としてみたり、平均値としてみるとそのような傾向が見られるが、全員一様にそのような変化の傾向を示しているわけではなく、個別に見ていくと変化の傾向はそれぞれかなり異なっていることが覗かれる。そこで、ひとりひとりの変化のパターンを類型化してとらえたのが図4から図10である。

それによると、1年から2年へかけての変化のパターンは、およそ7パターンに集約できる。以下、パターンごとにその特徴と、キャリア支援の方向について考えてみたい。

パターン1（図4）は、1年から2年への全体的な傾向と同じに、右上から左下へ、現状への肯定感が高まり、把握度は低くなるという変化を見せたパターンである。このパターンには7人ほど含まれる。1年時の「現状の肯定感」が中くらいから低めで、「把握度」が高めだった人たちが、2年になって「肯定感」は高まったが、将来に対する「迷い」や「選択肢の拡がり」が出て来て「現状の把握度」が低下している。このパターンに対するキャリア支援の在り方としては、将来に対する「迷い」や「選択肢の拡がり」

表3 変化量とパーソナリティ変数との相関係数

パーソナリティ変数	次元1 変化量	次元2 変化量
N：情緒的不安定傾向	-.005	-.043
E：外向性	-.129	-.140
O：開放性	.047	.079
A：協調性	-.027	-.171
C：誠実性	-.331 *	.089
CP：批判的親	-.065	.102
NP：養育的親	-.071	-.086
A：成人	-.037	.124
FC：自由な子ども	-.037	-.083
AC：順応した子ども	.044	-.300 *

* p<.05

は、モラトリアムの時期として好ましい側面もあるので、肯定感の高まる部分（うまく行っているところ）を支持しながら、いろいろ試すのを見守るのがよいと考えられる。

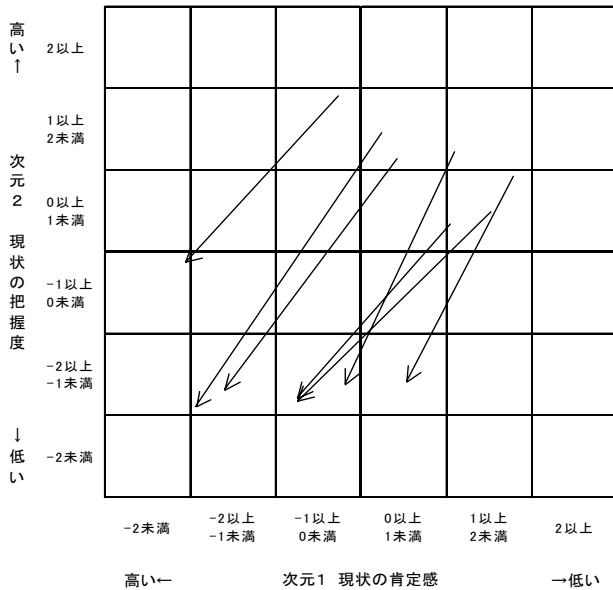


図4 パターン1(肯定感↑・把握度↓)

パターン2(図5)は、パターン1と同じく「肯定感」が高まった上に、「把握度」も高まっている(中央付近から左上への変化)。このパターンには5・6人ほど含まれる。「肯定感」「把握度」ともに中くらいから、どちらも高まっており、もとの記述レベルからみてもとくに問題は感じられない。キャリア支援の観点からは、順調に推移しているパターンともいえ、この調子で自分でやっていくことが期待される。

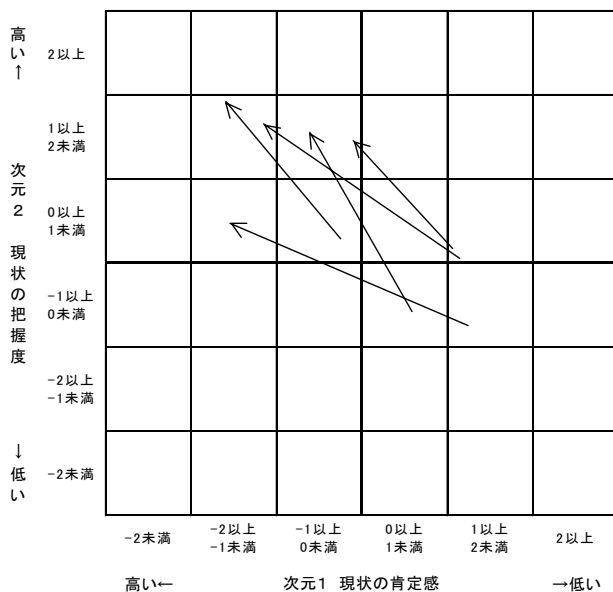


図5 パターン2(肯定感↑・把握度↑)

パターン3(図6)は、パターン1・2と同じく「肯定感」が高まっているが、把握度には変化がみられない(右からほぼ水平に左へ)パターンである。このパターンには5人ほど含まれる。把握度が中程度で、肯定感が中～低めの人が、把握度はそのまま、肯定感だけ高まっている。もとの記述レベルから見ると、把握度は増えていないが、肯定感が高まり本人は充実感を感じている様子なので、一応、安心な人たちと考えられる。

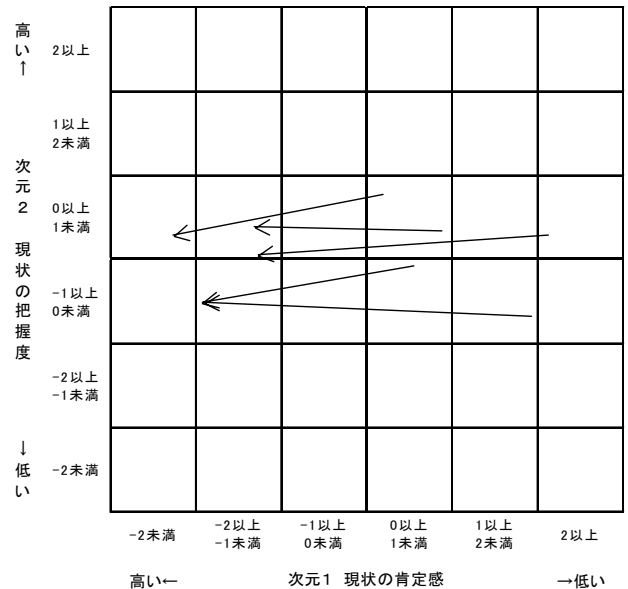


図6 パターン3(肯定感↑・把握度変化なし)

パターン4(図7)は、肯定感が低下し、把握度も下がっているパターンである。このパターンには3人ほど含まれる。一見心配なパターンと考えられるが、もとの記述レベルから見ると、入学時に肯定感・把握度とも「高め～中くらい」だった人たちが、学ぶにつれて迷いが出たり、失望や中だるみに陥り、それに伴い肯定感が低下している様子がうかがえる。キャリア支援の観点からは、入学までは親の意向や自分の思い込みがあったことに気がつき、自分の適性ややりたいことについて考えてみるのもよい機会かと思われるが(たとえばACの高い場合)、肯定感の低下(右方向への変化)があるので、一人で悩んで学校に出て来られなくならないよう、それなりの支援が必要なグループと考えられる。

パターン5(図8)は、肯定感はず変わらず、把握度のみが低下したパターン(もともと肯定感も把握度も中程度以上の人たち)。このパターンには3人ほどが含まれる。パターン4と、1年時の出発点は同じだが、迷いや焦りを感じて把握度が低下しても、肯定感は踏みとどまれている。このように肯定感が踏みとどまれているのは、パーソナリティが関連している可能性があるが、ここからは一概に言えない。このパターンのキャリア支援の在り方としては、

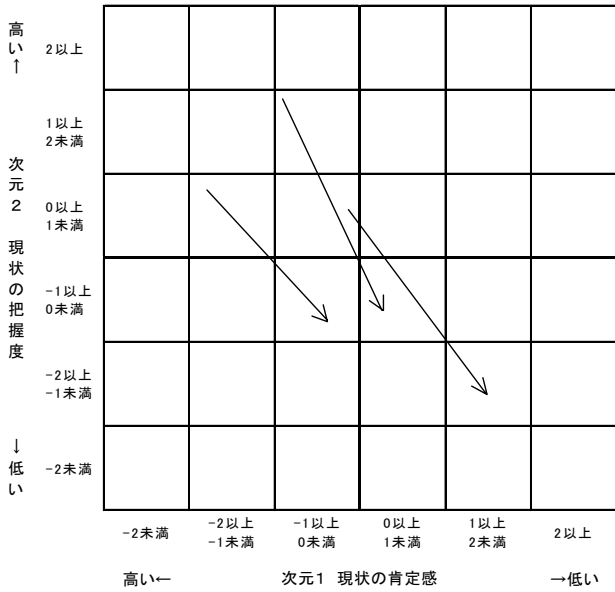


図7 パターン4 (肯定感↓・把握度↓)

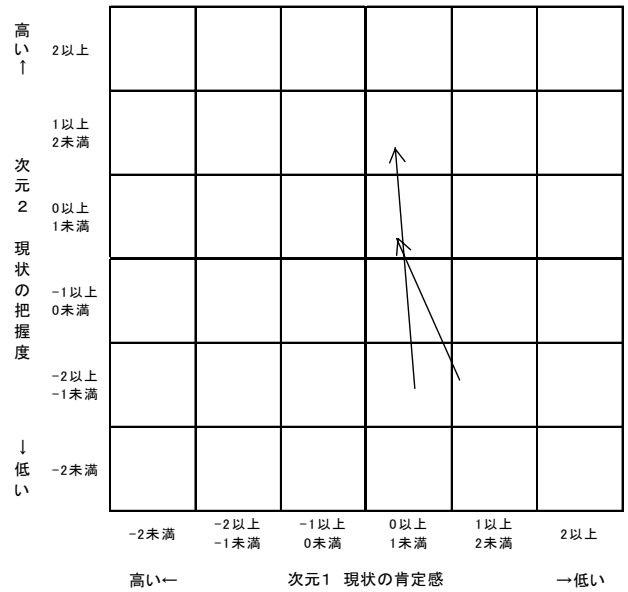


図9 パターン6 (肯定感変化なし・把握度↑)

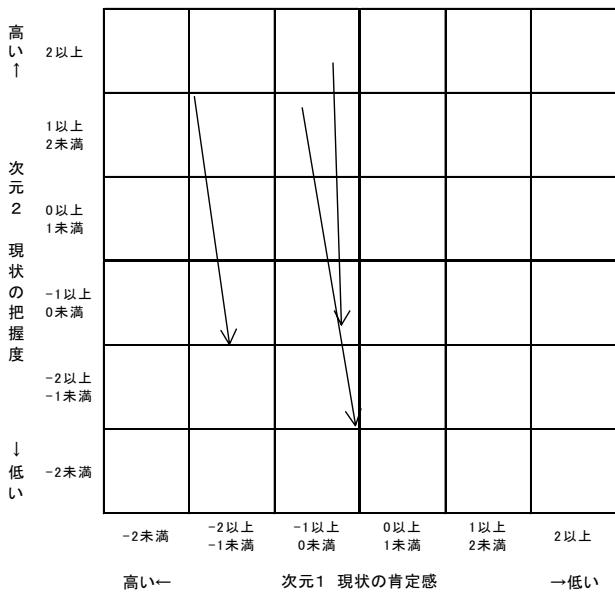


図8 パターン5 (肯定感変化なし・把握度↓)

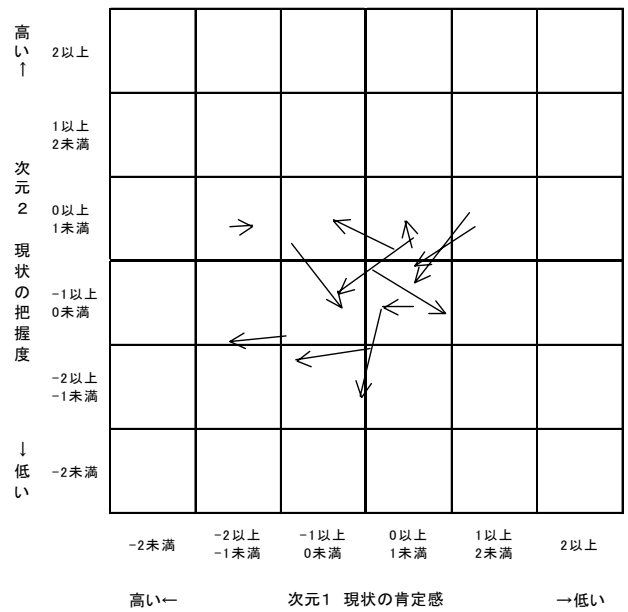


図10 パターン7 (肯定感・把握度とも大きな変化なし)

パターン1と似ているが、肯定感を保っている部分を支持しながら、いろいろ試すのを見守るのがよいと考えられる。

パターン6 (図9) は、肯定感はず変わらず、把握度のみが高まったパターンで、パターン5の逆のパターンである。もともと肯定感と把握度が低めの人たちで、肯定感が高まらないまま、忙しくなったり迷ったりしているタイプである。このパターンには2・3人ほどの人が含まれる。肯定感がやや低めであるので、その面での支援が必要であろう。

パターン7 (図10) は、「肯定感」「把握度」どちらの次元についても、「1未満の変化」しかなかった人たちで、こ

このパターンには12人ほど含まれる。中心周辺で、小さく動いているが、細かく見ると、もともと高めで、そのまま高めに安定している人もあれば、低めのところで変わらない人もいる。現在のところややくすぶっている感もあるが、これから動こうとしているのかもしれない、今後の動きを見守っていくのがよいと考えられる。

この7つのパターンで全体の63%前後を占めており、その他の変化はこれらに準ずるかたちとして捉えることができよう。

総合的考察

最後に、今回の研究を含む一連の研究(西村他, 2010, 2011a, 2011b)について総括しておきたい。

これまで大学生のキャリア形成支援の場で活用されている自己分析のツールは、大部分が特性論に基づくものである。しかし、キャリア形成支援の観点からみると、特性論に基づく自己分析には限界があり、自分の生き方を振り返らせるような自己分析が必要と考えられた。そのような観点からこの一連の研究では、入学の経緯や現在の学修状況、今の自分や将来の自己について記述させる物語論的ワークシートを開発し、質的アプローチと量的アプローチをミックスしたアプローチによりその有効性について検討を行ってきた。その結果、次のような点が明らかとなった。

1 今の自分の状況を捉えるためのカテゴリ

物語的ワークシートのなかでも特に「今の自分の状況」の記述について内容分析を行い(実際はナラティブ分析に近い)、今回の研究では、1・2年の女子大生の今の自分の状況を捉えるための14のカテゴリを切り出した。今回の研究を含む一連の研究では、特定の女子大学を対象としており、なおかつその中の特定の学科を対象としているため、これらのカテゴリが1・2年の低学年の女子大生の「今の自分の状況」を捉える上でどの程度、一般化できるかは一概に言えない。しかし、これらのカテゴリを基礎として行われた様々な分析から特定の女子大学や特定の学科を超えた有意味な情報がいろいろと得られたことから、今回の研究で抽出された14のカテゴリは、低学年の女子大生の今の自分の状況を捉える上でそれなりに必要なカテゴリを、ある程度揃い取れているのではないかと考える。もとより、これで十分とはいえないので、対象を共学校の女子大生や男子大学生に拡大して検証する必要がある。また、学科の専門性や資格についても幅広く検証してみる必要があろう。そのなかで、これらのカテゴリがどの程度、頑健性があるか検証されるであろうし、新たな有効なカテゴリが見いだされることが期待される。

2 今の自分の状況を捉えるための次元

低学年の女子大生の今の自分の状況を14のカテゴリで数量化し、多重応答分析で分析した結果、2つの重要な次元が抽出された。前報(西村他, 2011a)では、カテゴリの空間的配置の関係から、次元1を「自分がどの程度よく動いているか」を表す「活動性」の次元、次元2を「自分をどの程度よく説明できているか」を表す「説明度」の次元と解釈した。今回の研究でも基本的にほぼ同様の配置が得られたが、GTAに準ずる綿密な分析を行った結果、次元1は「活動性」というよりも活動性に伴う自己評価の意味が強いため「現状の肯定感」という名称に改めることにした。同様に、次元2は「説明度」というよりも説

明する上で自己の状況を把握できているかということが重要なので、「現状の把握度」という名称に改めることとした。これら2つの次元は、低学年の女子大生の今の自分の状況を捉える枠組みとしてそれなりに有効であると考えられる。もとより、この次元についてもこれで十分とはいえないので、対象を共学校の女子大生や男子大学生にも拡大して検証する必要がある。また、学科の専門性や資格についても幅広く検証してみる必要があろう。そのなかで、これらの次元の有効性がさらに検証されることが期待される。

なお、これらの次元によるサンプル・スコアは概ね正規分布を示している。このことから低学年の女子大生の多くは、今の自分の状況をほどほどの肯定感をもって捉え、また、今の自分の状況をほどほどに捉えていると推測される。また、ほどほど以上の肯定感とほどほど以上の把握度を持つ学生については、とくに問題はなく、いまの調子でやっていってもらえればよいと考えられる。しかし、肯定感や把握度がほどほど以下に低下している学生については、カウンセリングなどなんらかのキャリア支援が必要であると考えられる。

3 サンプル・スコアの学年差

サンプル・スコアに学年差があるのではないかということについては、前報(西村他, 2011a)の時点である程度示されていた。しかし、前報では、1年がB学科、2年がC学科であるため、学年の違いと学科の違いが交絡している可能性があり、それ以上の検討は無理であった。そこで、本研究ではB学科の2年のデータを追加し、B学科のみで学年差の検討を行った。その結果、2つの次元とも学年差のあることが明らかとなった。

次元1の学年差は、大学の1年よりも2年の方が現状の肯定感が高まっていることを意味している。これは、1年よりも2年の方が大学生活になれ、学修、サークル活動、アルバイトなどいろいろな側面で活動の範囲が広がってきており、現状を肯定的に受け止めている状況を反映していると考えられた。他方、次元2の学年差は、大学の1年よりも2年の方が現状の把握度が低くなっていることを示している。これは、1年の時は、現在の学修の状況や自分の将来について漠然と把握していたものが、2年になっていろいろと専門や資格について知識を得たり経験するなかで、自分の将来に対する見通しの甘さを自覚させられたり、現状の学修状況を反省したりすることが増えるためではないかと推測された。しかし、これらの結果はB学科のみの分析から得られたものであるため、どの程度一般化できるものかについては、他の学科に広げて検証してみる必要があろう。

4 サンプル・スコアの変化量とパーソナリティ変数との関連

1年と2年にわたって繰り返し測定したサンプルについ

てそのサンプル・スコアの変化量を算出したところ、次元1も次元2もその変化量は正規型を示しており、なんらかの心理的・行動的内容を反映している可能性が考えられた。そこで、これらの変化量とパーソナリティ変数との相関係数について分析したところ、二つの低い相関が統計的に有意な相関が得られた。一つは、次元1の変化量とNEOのC(誠実性)との間に低い相関が示された。これは、1年生から2年生へかけての現状の肯定感の増加は、学生の達成意欲の高さに関連しており、達成意欲の高い学生ほど現状の肯定感が増加していることを意味していると考えられた。いま一つ、次元2の現状の把握度の変化量とTEGIIのAC(従順な子ども)との間に有意な逆相関が示された。これは、外に従順なよい子ほど現状の把握度が低下する傾向があることを示している。この理由としては、これまで外に対して従順であったよい子ほど、現在の学修状況に満足できなくなったり、疑いなく選んで進んできた自分の進路について迷いが生じやすい可能性が考えられた。しかし、これらの結果については、さらに検証してみる必要がある。

なお、今回の研究のサンプル・スコアの変化量とパーソナリティ変数との相関分析では、前報(西村他, 2011a)のサンプル・スコアとパーソナリティ変数との相関分析では有意な相関の認められなかったパーソナリティ変数との間に有意な逆相関が認められている点が興味深い。パーソナリティ変数と自己意識の関連は、測定時点の一時的な自己意識だけでなく、長期的なスパンで見たとときの自己意識の変動とも関連してくる可能性があることを示している点で注目に値する。

5 サンプル・スコアの変化パターン

全体としてみると、1年から2年にかけて、現状の肯定感が増加する一方で、現状の把握度が低下する傾向が覗かれた。しかし、全員一様にそのような方向に変化しているわけではなく、個別に見ていくと変化の方向や程度は様々である。そこで、ひとりひとりの変化に注目しながら特徴的な変化パターンを見ていくと、「現状の肯定感」「現状の把握度」という2つの次元についての変化の方向の組合せと程度によって、およそ7つのパターンに集約できることがわかった。パターン1は、現状の肯定感が増加し、現状の把握度が低下するタイプである。パターン2は、現状の肯定感、現状の把握度ともに増加するタイプである。パターン3は、現状の把握度は変わらないものの、現状の肯定感が増加するタイプである。パターン4は、現状の肯定感、現状の把握度ともに低下してしまうタイプである。パターン5は、現状の肯定感、現状の把握度ともに低下するタイプである。パターン6は、現状の肯定感、現状の把握度ともに増加するタイプである。パターン7は、現状の肯定感、現状の把握度ともに大きな

変化のないタイプである。

キャリア支援の観点からは、「現状の肯定感」が高い人は、学業に集中できないときにも、部活やバイトなどで何らかの充実感を感じている傾向が認められるため、そうした肯定感を支持していけるように支援することが重要と考えられる。他方、「肯定感」が低下している人には、小さくても実現可能な活動してみるように勧めるような支援がよいと考えられ、「現状の把握度」が低下している人に対しては、忙しさ、先の見通しに対する焦りや不安がみられるので、それに応じた支援が必要になると考えられる。忙しすぎる場合はやるべきことの整理をして洞察の時間を作ることがよいと考えられる。また、先の見通しの不安については、先輩や社会人の話を聴く機会など接点を作るなどして、将来に向けて情報収集や、具体的な習練が積めるような支援が必要であると考えられる。

6 今後の課題

すでに述べたことであるが、この物語論的ワークシートの有用性を明らかにしていく上では、共学の女子学生や男子学生での検証、専門や資格の異なる学生での検証が重要であると考えられる。

他方、今回の研究を含めた一連の研究を振り返ると、今の自分の状況についての記述を中心に検討してきたが、入学の経緯や現在の学修状況、あるいは将来の自己との関連についても分析を進めていく必要がある。とくに、大学1年と2年の低学年においては、入学の経緯や現在の学修状況との関連で今の自分の状況を捉える分析が必要であると考えられる。また、今後、大学3年と4年の高学年に分析を進めていく場合には、将来の自己、目標設定との関連で今の自分の状況を捉える分析が必要になってくると思われる。

謝辞

今回の研究を含めた一連の研究は、東京家政大学地域共同研究支援による「女子大生のキャリア支援のための自己分析ツールの開発に関する研究」として、平成21年度から3年間にわたって行われた。終止符を打つに当たって、自己分析ツールの情報収集にあたり、いろいろと貴重なご教示をいただいたバーナード大学キャリア開発センター所長 Robert Earl、ウェルズリー大学仕事とサービスセンター副所長 Folly Patterson、アメリカン大学キャリアセンター所長 Katherine Stahl と副所長 Susan Gordon、ジョージタウン大学キャリア教育センター副所長 Elizabeth Livingston、カルフォルニア大学バークレー校キャリアセンター所長 Thomas Delvin、スタンフォード大学の John Krumboltz 教授、ならびにキャリア開発センター所長 Lance Choy に改めて謝意を表する次第である。また、度重なる調査にご協力いただいた学生諸君に心から感謝申し上げる。

文献

- 有馬明恵 2007 内容分析の方法 ナカニシヤ出版
- Creswell, J.W. 2003 Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches (2nd ed.) Sage Publications, Inc. 操 華子・森岡 崇(共訳) 2007 研究デザイン—質的・量的・そして ミックス法 日本看護協会出版会
- 榎本博明 2008 自己物語から自己の発達をとらえる 榎本博明(編) 自己心理学2 生涯発達進学へのアプローチ 金子書房 pp.62-81.
- 榎本博明 2009 パーソナリティの物語論的把握 榎本博明・安藤寿康・堀毛一也(著) パーソナリティ心理学 有斐閣アルマ
- 戈木クレイグヒル滋子 2006 グラウンデッド・セオリー・アプローチ—理論を生み出すまで 新曜社
- 石井貞夫 2001 S P S Sによるカテゴリカルデータ分析の手順 東京図書
- 柏木繁男 1997 性格の評価と表現：特性5因子論からのアプローチ 有斐閣ブックス
- 西村純一・平澤尚孝・福本俊・堀田千秋・井島由佳・佐久間香子・吉田滋子 2010 女子大生のキャリア形成支援の基礎的研究 日本社会心理学会 第51回大会論文集 pp.138-139.
- 西村純一・平澤尚孝・福本俊・堀田千秋・佐久間香子・吉田滋子・井島由佳 2011a 物語論的自己分析ツール作成の試み：女子大生のキャリア支援のための基礎的研究 東京家政大学紀要 第51集(1) pp.79-86.
- 西村純一・佐久間香子・吉田滋子・平澤尚孝・福本俊・堀田千秋・井島由佳 2011b 女子大生のキャリア形成支援の基礎的研究Ⅱ 日本社会心理学会 第52回大会論文集 152p.
- 東京大学医学部心療内科TEG研究会, 2006 新版TEGⅡ 解説とエゴグラム・パターン 金子書房
- 辻 平治郎 1998 5因子性格検査の理論と実際 北大路書房
- 渡辺三枝子 2009 大学生のキャリア, なぜいま支援が必要か 教育学術新聞 平成21年10月21日

Summary

In the present study, we investigated how the sense of self of students at a women's college changed between the freshman and sophomore years. At a women's college, 94 freshmen completed a self-narrative worksheet comprising descriptions including college entry background, current state of learning, current self, and future self. In addition, NEO and TEGII inventories were conducted to elucidate personality variables. The following year, a repeat survey was conducted regarding current self only. Freshman and sophomore data were combined, content analysis was performed on descriptions regarding current self, and 14 categories were extracted. Multiple correspondence analysis was applied to categorical data, and two dimensions were extracted. Dimension One comprised positive feelings towards current state of self and Dimension Two comprised degree of understanding of current state of self. Overall, positive feelings towards self tended to increase, while degree of understanding decreased between the freshman and sophomore years. However, looking at individual results, there were various directions and degrees of change that could be roughly arranged into seven patterns. Correlation analysis of variation in sample scores and personality variables suggested tendencies for higher achievement striving (Conscientiousness on the NEO) to correlate with higher positive feelings and for greater submissiveness (Adapted Child of the TEGII) to correspond to lower understanding of self. These findings informed several discussions regarding career support requirements between university freshman and sophomore years and the utility of narrative self-assessment.